



トビアス・ストーリー (4) 結婚

ラグエルの住む町に入ると、トビアスのほうがアザリアを急ぎ立てて、ラグエルの家に行きます。ラグエルの家族は、トビアスが親族トビトの息子と知って、跳び上がり、愛情を込めて口づけし、涙を流しました。トビトの失明を知って、妻のエドナも娘のサラも、涙を流し、悲しみました。そして、長旅をしてきたトビアスを心からもてなしました。

食事が始まる前に、トビアスはアザリアにサラと結婚できるように頼んでくれと言います。ラグエルはサラの悲しい不幸な過去、七人の同族の男に与えたが、一人の例外もなく男は初夜の床で死んだと、漏らさず伝え、トビアスに諦めるようにと言います。けれどもトビアスは引き下がりません。仕方なく、ラグエルは「娘をあなたに与えましょう。娘があなたの妻になることは、天の定めでもあったのです。子よ、天の主が今夜、憐れみと平安のうちにあなたがたを守ってくださるように」と、結婚を許します。けれども、ラグエルはこの結婚でトビトの命が奪われるかもしれないという恐れのがちが拭えませんでした。

自分の身の上を思って苦しみ、死ぬほど悲しんでいたのはサラでした。夫となるべき人を次々と失い、「あなたが殺した」と侮辱され、悲しみのあまり首をくくろうとしたのです。けれども、両親の悲しむことを考え、思い直し、神に胸の内を切々と訴えて、祈っていたのです。「どうかわたしがこの世から解放され、辱めの言葉を二度と耳にすることのないようにしてください。私がこれ以上生きながらえて、何になりましょう。しかし、もし私の命を奪うことをお望みにならないならば、主よ、今わたしに向けられている辱めの言葉をお聞きください」と。

不安で結婚を喜ぶことのできない、悲しみのサラと、トビアスは結婚の初夜をむかえます。



トビアスはサラの待つ部屋に入ると、アザリアの教えのとおり、魚の心臓、肝臓を袋から取り出し、香を焚いてその上で燻しました。

トビアスはサラを呼びます。

「愛する者よ、起きなさい。二人で祈り、主が私たちを憐れんで救ってくださるように願い求めよう。」

サラも起き上がり、二人で心を合わせて祈ります。

「どうか、私たちを憐れんで救ってくださるように」

「どうか私たちが共に年老いていくことができるようにしてください」と。そして眠りに就きました。

- ・ サラも、生きることを望んでいない、むしろ死にたいと願う悲しい、哀れな女性です。両親を思い、健気に針のむしろの上で、忍耐しながら、祈りながら、生きていたのでしょう。彼女も不条理とも思える境遇を、生きていたのです。けれども彼女の祈りが神に届いていると聖書は伝えています。(私の感想)